

氏 名	なか はら たかし 仲 原 孝
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 513 号
学位授与の日付	平 成 18 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ハイデガーの根本洞察

論文調査委員	(主 査) 教 授 氣 多 雅 子	助教授 杉 村 靖 彦	教 授 藤 田 正 勝
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の趣旨は、マルティン・ハイデガーの主著『存在と時間』の根本洞察を明らかにし、その根本洞察がハイデガーの後期思想をも貫くものであることを解明するところにある。『存在と時間』は「前半部」のみが公刊されただけで途絶している未完の書であり、公刊されなかった第1部第3編「時間と存在」で何が書かれる予定であったかということが論議を呼んできた。『存在と時間』の根本洞察を明らかにするには、この部分でハイデガーが何を語ろうとしていたかを、現在手に入る資料に基づいて再構成することが必要になる。しかも、ハイデガーがこの書を完成させることができなかったという事実は、この書がその根本洞察において或る破綻を含んでいたことを示している。この破綻の所在まで含めて『存在と時間』の思想の姿を明らかにしたとき初めて、この書の思想について真に全貌を明らかにしたとすることができる。そこで本論文では、第1部で『存在と時間』が語ろうとしていた積極的洞察を再構成し、第2部で『存在と時間』の挫折の所在を明らかにする、という手順で考察を進めていく。

第1部は四編で構成される。まず第1編から第3編までで、『存在と時間』の公刊部分に関するいまだ解決されていない三つの根本的な疑問を順次解決していくことを通じて、この書の思想に対する基本的な理解を準備し、その上で、第4編でこの書の最も根本的な洞察を再構成する、というのが第1部の構成である。

まず第1編では、『存在と時間』は存在の問いを問うのになぜ最初に現存在（人間）という特定の存在者に問い掛けなければならなかったのか、という疑問が取り上げられる。この疑問に明解に答える鍵は、ハイデガー自身が無造作に同一視している「現存在」と「人間」という二つの概念を厳密に区別することである。存在の問いを問うために最初に行わなければならないのは、「人間」という類に属する存在者が普遍的に共有している本質に向かって問い掛けることではなく、存在の問いを問うている当の自己自身に向かって問い掛けるということであり、つまり自己関係的存在（実存）を根源的に遂行するということである。なぜなら『存在と時間』のハイデガーは、実存が存在理解一般を根拠づけていると考えているからであり、根源的な存在理解を獲得するためには、まず実存を根源的に遂行する道を切り開いておく必要があると考えているからである。『存在と時間』が問いかけようとしているのは人間ではなくて現存在であるということが、この書の公刊部分で遂行されている現存在分析論を、この書の最終目的である「存在の問い」の文脈のなかに位置づけて理解する上で非常に重要だということが、確認される。

第2編では、「本来の実存において一切の自他関係が断絶する」という意味の発言と、「本来の実存においても積極的な自他関係が成立する」という意味の発言とが、『存在と時間』で同時に行われているのをいかに理解すべきか、という問題が取り上げられる。この問題を解決するために、「本来の実存」と対をなす「頹落」という概念に着目し、後者の意味を一義的に特定することを通じて、「本来の実存」の本質を明らかにする。そして、『存在と時間』の「頹落」概念の詳細な分析の結果、この概念が、「眼前存在への頹落」（自己の存在を眼前存在として理解すること）と、「逆照射的頹落」（自己を他者から理解すること）という二つの相容れない規定を同時に含んでいることが明らかにされる。上記の二義的発言は、頹落概念のこの自己分裂の帰結として生じているものなのである。しかし、『存在と時間』が本来解明しようとしたのは、あくまで

「眼前存在への頹落」の方である。現存在が現存在自身を含む一切の存在者の存在を眼前存在としてしか理解せず、存在の根源的な意味を一貫して忘却しているのはなぜなのかを明らかにすると同時に、この忘却を克服して存在の根源的な意味を理解する通路を開くのが、この書の公刊部分で遂行されている現存在分析論の最も重要な課題である。「眼前存在への頹落」を解明するのに寄与するどころか、むしろこの解明を妨げる「逆照射の頹落」の概念をハイデガーがこの書に導入したのは、彼が自己の問題を自己自身で誤認し、存在の問題と存在者の問題とを混同した結果にほかならない。第2編の論考は、『存在と時間』が自己分裂的著作であることを暴露することで、第2部で行われる「挫折」の論考を準備するという意味をもっている。

第3編では、「本来の実存が頹落を克服する」という意味の発言と「本来の実存においても頹落は消え去るわけではない」という意味の発言とが『存在と時間』で同時に行われているのを如何に理解すべきであるか、という問題が取り上げられる。この問題を解決するために本論文では、「実存的」と「実存論的」という概念対の意味に着目する。実存的理解とは、現存在の存在の根源的な真理を忘却したまま実存している日常的な現存在の実存様態を導いている理解のあり方を意味しており、実存論的理解とは、日常性のうちで忘却されている現存在の存在の根源的な真理を言葉による現象学的解釈によって自覚へともたすような理解のあり方を意味している。問題は、「本来の実存」を可能にする理解の様態を表わす「先駆的覚悟性」という概念が、実存的理解を意味するのか、実存論的理解を意味するのかが、『存在と時間』では十分に明らかにされていないことである。しかし、本論文は各種の根拠に基づいて、先駆的覚悟性は実存論的理解として成立するとハイデガーが確かに考えていたことを立証する。このように理解することによって、現存在は実存的には自己の存在の根源的な真理を飛び越すことによってしか実存することができないが、しかし同時に言葉による実存論的理解の上では自己の存在の根源的な真理を理解することができる、と考えられることになる。つまり現存在は、「存在一般を眼前存在と同一視する先入観の支配」という意味での頹落は、たしかに先駆的覚悟性のうちで現存在の存在に対する実存論的理解を実現することによって克服することができるが、現存在が「自己の存在の根源的な真理を飛び越すこと」という意味での頹落は、先駆的覚悟性が実現されても消え去るわけではないのである。第3編が主題とした二義的発言は、この二つの頹落をハイデガーが厳密に区別していないがゆえに生じているものである。そこで、『存在と時間』の根本洞察の再構成に到達するためには、この二つの頹落を厳密に区別した上で、頹落を克服することが如何にして存在一般の根源的な真理を解明することに繋がるのかを明らかにしなければならないことになる。

以上の考察を背景として、第4編では、公刊されなかった部分も含む『存在と時間』全体の核心的洞察が再構成される。その洞察とは、「存在は非存在の可能性と同時に開示される時に最も根源的な真理において理解される」というものである。「頹落」とは存在一般を眼前存在（あらゆる非存在と排他的な意味での存在）と同一視する先入観の支配を意味しており、「本来の実存」とは、現存在の存在が「死へと向かう存在」であることをあらわにすることを通じて、存在一般を非存在の可能性と同時に開示する実存様態を意味しているが故に、ハイデガーは『存在と時間』公刊部分で、頹落を克服する本来の実存の理念を確立しようとしたのである。そして、存在の現実性と非存在の可能性とが同時に開示されることは、存在の現実性が現在の地平のうちで、そして非存在の可能性が将来の地平のうちで、いずれも同一の「時間」を構成する契機として開示されることで初めて可能となる。時間は存在の真理が開示されることを可能にする地平であるということを明らかにすることが、『存在と時間』の最終的な目標であったのである。

つづく第2部では、『存在と時間』の構想が挫折した原因を明らかにする。まず第1編で、公刊されなかった『存在と時間』第1部第3編「時間と存在」の具体的な構想を、現在手に入る限りの資料に基づいて再現する。ここで、『存在と時間』執筆時点ですでにハイデガーが、「基礎的存在論」から「メタ存在論」への「転回」を構想していたことを、各種の証拠に基づいて立証し、ハイデガーはまさしくこの「転回」を遂行する途上で挫折したのだということを明らかにする。基礎的存在論は、現存在から出発して現存在の存在の意味である「時間性」へ、そしてさらに時間性の地平である「とき性」へと進む学であるのに対して、メタ存在論とは、「とき性」から出発して存在者全体を根拠づけることを課題とする学である。「時間と存在」の編は、その前半部分で「とき性」の概念を確立し、後半部分で「転回」と「メタ存在論」の理念を提示するという構造で組み立てられるはずであった。

ところがハイデガーはこの転回を実際に遂行することができなかった。それは、「とき性」の概念から現存在の諸現象を

解明する「実存の形而上学」が実行不可能だったからである。本来的時間性を将来から時熟する時間性として、非本来的時間性を現在から時熟する時間性として、つまり両者を互いに排他的なものとして説明する『存在と時間』の概念体系のなかでは、「とき性」と「時間性」はつねに連動して本来性と非本来性という様態をとると考えることしかできない。したがって、良心を持とうとする現存在の「意志」によって成立する先駆的覚悟性が頹落を克服する、という『存在と時間』公刊部分での思想を維持しようとする限り、「とき性」もまた現存在の意志に依存するものと考えざるを得なくなり、「とき性」は「時間性」の単なる一契機と化し、現存在の「脱自の地平」ではなくなってしまうことになる。ハイデガーが「時間性」と区別して「とき性」概念を立てているのは、存在一般の開示性を可能にしている時間は各自的現存在の意志や企投に依存しない外部的性格をもっているという思想に基づいているのであるが、『存在と時間』の概念体系は、ハイデガーの意志に反して存在を現存在に内在させる帰結をもたらしてしまうのである。

この不可避的な帰結に気づいたとき、ハイデガーは『存在と時間』の概念体系を放棄し、存在の外部的性格を整合的に理解可能にするまったく新しい思想構図を模索し始める。本論文第2部第2編では、『存在と時間』直後の著作や講義録に現れている、こうした思想の変容の過程がたどられる。本来的時間性と非本来的時間性とを互いに排他的なものと考えることが『存在と時間』の挫折を帰結した、という第2部第1編の結論は、直接的な典拠に基づくものではなく、現在手に入る限りの資料からの推論に基づいて構築されたものであるが故に、それだけでは確かな結論と言うことはできない。そこで、『存在と時間』直後のハイデガーが実際に本来的時間性と非本来的時間性とを互いに排他的には考えない道を模索していることを立証することで、第1編の結論に対する間接的な証拠を提示するのが、第2編の課題である。ハイデガーはこの時期、上記の問題を解決するために、「本来性」の概念を自己の体系から除去するとともに、「現存在」概念の意味を変容し、各自的存在者ではなく歴史的な実存様態を意味する概念として捉え直している。彼は「存在忘却」を、現存在が何らかの怠慢によって存在の真理を忘れてしまうこととしてではなく、存在そのものがそれ自身を覆蔵する歴史として説明する後期の思想構図を作り上げていくのである。

論文審査の結果の要旨

マルティン・ハイデガーの『存在と時間』は未完の著作であり、予定された第1部第3編「時間と存在」がなぜ公刊されなかったのかということは、ハイデガーの思想の解明において決定的に重要な意味をもっている。それ故、多くの研究者がその理由についてさまざまな分析や憶測を行ってきたが、本論文はそれを解明する論考を、極めて周到に且つ論理的に展開した。そのことは、まず最初に特筆すべき本論文の重要な成果である。

だが、本論文の目的は単に『存在と時間』の挫折の原因解明にあるのではなく、ハイデガーの根本洞察を取り出すことにある。その根本洞察は「存在は非存在の可能性と同時に開示される時に最も根源的な真理において理解される」ということとして、誤解を許さない明晰な仕方で言説化される。論者はその根本洞察をハイデガーが『存在と時間』で語ろうとしたことの分析から取り出し、ハイデガーが『存在と時間』で語り得なかったことの解明から確認している。その両面から明らかにされたことによって、この根本洞察は、前期から後期への一貫したハイデガー理解の可能性を示唆するものとなっている。このような仕方での書の全貌を論じた先行研究はほとんどないと言ってよい。これが、本論文のもう一つの大きな成果である。

このような成果をもたらした本論文の論考の特徴は、以下の四つにまとめられる。

第一に、もっぱらハイデガーの思想の論理的整合性を追究するという点である。ハイデガーが方法論として採用した現象学の言葉が厳格な論理的整合性の要求とどこまで合致するかということは、議論の余地がある。しかし、論理的整合性を追い求めるということは哲学のテキストに向かう最も基本的な態度の一つであり、その態度を徹底することによって本論文がハイデガー思想の解明に一つの大きな成果を挙げたことは評価できる。

第二に、ハイデガー思想の矛盾と分裂を暴くという批判的態度をとる点である。多くの研究者はハイデガーの叙述に矛盾を発見したとき、それが矛盾ではなくなるような理解の仕方を見出そうと努力する。しかし論者は、論述の矛盾の責任をハイデガー自身に帰し、その矛盾から切り込んで、ハイデガーと「批判的対話」をしようとする。このやり方はハイデガーのような大きな存在に対してあまりに大胆に見えるが、長い年月をかけて膨大な著作群を徹底的に読み込んできた論者の研究

の歩みとその批判的態度を支えており、新鮮なハイデガー解釈を構築するのに成功している。とはいえ、この態度に対しては当然、異論が予想される。

第三に、発展史的研究や文献学的研究ではなく、ハイデガーの思想そのものの研究だという点である。本論文は真っ直ぐにハイデガー哲学の根幹を掴むことをめざしている。その志はおおいに評価できるが、発展史的研究とは一線を画そうとするあまり、初期フライブルク時代の論考を一切考慮に入れないことで『存在と時間』の理解をやや狭めている感があるのが惜しまれる。

第四に、際立った徹底性である。前述の三つの特徴的態度は徹底的に遂行され、中途半端に妥協することがない。そのことによって、本論文は輪郭のはっきりした独自のハイデガー解釈となり得ている。

これらの特徴は、本論文がハイデガー研究者に賛否両論の激しい論争を引き起こす性格のものであることを示している。その性格は、本論文のように精度の高い議論によって論者の主張が支えられている限り、学界に大きな刺激を与えるはずであり、哲学研究のあり方として高く評価されて然るべきである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2006年3月31日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。